本会顧問　梅原末治博士訃

京都大学名誉教授、文学博士梅原末治先生は、十年ちかい入院加療も空しく、今年二月十九日に逝去された。明治二十六年八月十三日の生れで、あと半年で満九十歳になられるところであった。先生は、大正初めから昭和の今日まで、わがくに考古学界の主流をリードしてこられ、その深い学殖と優れた労作によって昭和三十七年度朝日賞をお受けになり、翌年、文化功労者として表彰された。

先生は、明治四十五年、十九歳のとき以来六十年のあいだ、一年の途絶えもなく、千百件以上の著作を発表された。そのうち編著の単行本は百二十冊を越えて積みあげると背丈を越えるほどの浩瀚な量である。先生の業績は、地域によって日本考古学・朝鮮考古学・中国考古学の三分野に大別できるが、それぞれに研究上不可欠の基本的調査の記録が多いし、また画期的な学説の発表もすくなくない。そこで、後に続く研究者は、先生の業績を踏まえて進まなければならない。先生ほどその著作を引用される考古学者は稀であろう。

このような梅原先生の業績を、限られた紙数でまとめることは至難である。幸い先生の自叙伝『考古学六十年』（平凡社 昭和四十八年）が刊行されているので、詳しいことは同書に譲るのが至当であろう。たまたま筆者は、先生の最初の受講生の一人であった。その頃の思い出を記して、ありし日の先生を追憶することにしたい。

昭和四年四月、梅原先生は三年四か月ぶりに欧米留学から帰国され、直ちに東方文化学院京都研究所（現京都大学人文科学研究所）の研究員に就任された。同時に京都帝国大学文学部の講師になり、特殊講義と考古学実習を担当された。筆者は、二回生に進んで専攻を考古学ときめたばかりであったから、先生の最初の受講生の一人になったのである。

講義は中国考古学概説であって、旧石器時代に始まり、彩陶文化、黒陶文化、殷周の青銅器、戦国式銅器と続いた。先生は欧米留学中に各国の博物館や蒐集家の収蔵する中国出土遺物を調査研

究され、実測図・拓本・写真などの資料を作ってこられた。それらを示しながらの講義は斬新であった。われわれ専攻学生だけでなく、他の学科の学生や卒業生たちも熱心に聴いていた。

ストックホルムでアンダーソン博士将来の甘粛の彩陶を調査された話、レニングラードの物質文化研究所で外蒙古ノイン・ウラ出土の中国関係遺物を整理された苦心談は、あの頃の若々しい先生の軒昂たる話しぶりとともに筆者の記憶に鮮やかである。

そのときの欧米留学は、梅原先生の学問形成に大きく役立ったが、その間の苦心と努力には並々ならぬものがあったに相違ない。目的は博物館や蒐集家が収蔵する中国出土の古銅器あるいは鑑鏡の調査であったが、その場合、先生は品物を一つ一つ手にとって丹念に実測し、拓本をとり、記録を作るのでなければ満足できなかった。ガラス越しの観察や写真からでは納得できないというのが先生の主張であった。それにしても、外国で自分の立場を貫き多量の記録を作ってこられた先生の意志の強さと情熱には敬服のほかない。

しかし、同時に、自分の努力で特別の扱いをうけて調査できた資料ではあっても、もともと公的な性格のものであるから、速やかに学術論文として公表すべきであると考えておられた。そこで、研究所では、欧米で作った記録の整理と研究のまとめを課題の一つとされていた。

そして『殷墟出土の白色土器の研究』(昭和七年)、『柉禁の考古学的研究』(昭和八年)、『漢以前の古鏡の研究』(昭和十一年)、『戦国式銅器の研究』(昭和十一年)などの大冊が研究所の研究報告シリーズとして相次いで出版された。当時を回顧すると先生は非常に多忙で、考古学教室の席にくつろいでおられるのを見たことがなかったと思う。

考古学実習では、遺物・遺跡をよく見るようにと厳しく言われるのが常であった。拓本のとりかた、実測図の作りかたを丁寧に指導された。時には、先生自身が拓本とりに熱中することがあった。われわれは、度の強い眼鏡をかけた先生が、鏡や銅器に顔を近づけ、嘗めるように作業をされるのをただ見惚れてしまうこともあった。あの真摯でひたむきな先生の仕事ぶりは、最晩年まで変ることがなかった。先生は、拓本をとったり、実測図を描いているときが、一番楽しいとよく言っておられた。そして、その日の調査結果は、その日のうちにまとめて整理するようにと諭されたものである。

考古学的研究は、着実な資料蒐集と整理を土台にして築きあげなければならない、というのが先生の信念であった。先生は生涯を通じて、それを実行し、後進に垂範されていた。

(有光教一 記)